

埼玉の夜明け

巻号 44
第2号
通算137号

団区会
教地員
スト玉
リ埼
キ区委
東教
日本
関東
社

第五回 平和を求める八・二五集会

平和をつくり出す人たち

原爆廃止運動家
(被爆体験者) 近藤 紘子



原子爆弾のことなど何一つ記憶にない私が広島語り部として歩むのは、次の時代を担う子供たちが神様から与えられた命を大切に生きていって欲しいと祈り、願うからです。

一九四五年八月六日、広島島の爆心地から一・一kmの牧師館で、母に抱かれて生後八ヶ月であった私は、家の下敷きになりましたが奇跡的に助かりました。牧師の子として生まれ育ち、廃墟となった広

島の被爆者の苦悩を肌で感じ、また多くの救済する人々との出会いを通し、戦争のもたらす悲惨さと苦難を知りました。生き残った者として私が証しさせて頂ける幸いを感謝いたします。

被爆後、爆心地から八〇〇mの広島流川教会に一人、二人と集まって来たお姉さんたちは、私を妹のように可愛がってくれましたが、その方たちのひどく火傷をおった顔を見ることができなかつた。どうしてこのお姉さんたちの顔はケロイドになったのか、助かった私には理解できませんでしたが、それは広島街に原爆が落ちたのが原因だと徐々にわかりました。このお姉さんたちや、親を亡くした子供たちとの出会いを通

して、原子爆弾投下がなければ、多くの人達は尊い命を亡くすことはなかったのに、又悲しむことはなかったのと思ひ、広島に爆弾を落としたB29エノラ・ゲイ号の乗組員たちを憎み始めました。

何時の日か私が大人になった時に、あの爆弾を落とした人たちを見つげ出し、お姉さんたちや原爆孤児の悔しさをこの私の手で仇を取る、と心に誓いました。しかしその敵との出会いは意外と早く訪れました。

被爆一〇年後の一九五五年（昭和三〇年）、二五人の広島で被爆した「原爆乙女」のお姉さんたちは、ニューヨークの病院で治療を受けるため、父と共に渡米しました。翌日、急遽、米国のテレビ局の依頼により母と私たち兄弟も渡米することになりました。「It's Is Your Life（これはあなたの人生だ）」で父の人生で関わった人たちと父との対面番組に出演するためでした。私の知らないおじさんを舞台のそでに見つけた私に「あの方はキャプテン・ロバート・ルイス（Captain Robert Lewis）」で、広島に原爆を落としたB29エノラ・ゲイ号に乗っていた副操縦士」と母から聞かされ、驚きました。私の計画では、いつ

の日か、私が大人になってから復讐しようと思っていた人を観客の見ている前で叩くこともできない。一〇歳の私にとって、敵であるそのおじさんを睨みつけることが精一杯でした。「あなたたちさえあの爆弾を落とさなければ、多くの人が苦しまないで済んだのに」という思いで一生懸命目を開いて憎しみをこめて睨み付けました。司会者は被爆した父を前にして、爆弾を落としたキャプテン・

ルイス氏に「原爆を落とした後、あなたは どう思いましたか」と聞くと、キャプテン・ルイスは「八時一五分丁度エノラ・ゲイ号は爆弾投下後、広島上空を去り、再びその落とした爆弾の威力を見るために、広島上空に戻り、そして広島上空から広島を見た。広島が消えていた」と。そして彼いわく「飛行日誌に、My God, what we have we done!（おお、神よ、私たちはなんとしたことをしてしまったのか！）」と書きました」と声を詰らせながら言いました。私は「あなたは悪い人だ」という思いで睨み付けていたキャプテン・ルイスの目から涙が溢れ落ちたのを見逃しませんでした。衝撃的でした。彼の涙を見た時、心の中で、神様に許しを求めました。

「神様ごめんさい。私はこの人のことを何にも知らないのに、今の今まで、この人たちが悪い人、私はいい人だと信じていました。私はいい人だと思いがわかりました。神様赦して下さい」と。私が憎むべきものは、戦争を起す人間の心の中の悪。自分の心の中を見たら、私も弟と喧嘩する、親の言うことは聞かない、自分の心の中にも多くの罪があることに気づきました。テレビの番組が終わって、私はそうつとそのおじさんの横に並んだ。おじさんの手をそつと触った。おじさんは私の小さな手を握った。それは温かい手だった。大きな手だった。このキャプテン・ルイスとの出会いを、私は本当に感謝しています。もし私がこの人に出会わなかったら、いつまでも、いつまでも、広島悲しみしか心に留めていなかったと思うし、彼の苦しみなど心に留めることはなかったと思います。彼の涙によって私の考えは変えられた。憎むべきは戦争をおこす人間の心の中の悪であり、戦争とは勝者も敗者もないことを学びました。彼は精神を病み、「キノコ雲と一滴の涙」の彫刻を残して一九八三年に亡くなりました。

私は、幼い頃から放射能が人体にどのような影響を与えるかを調べる為に米国の機関である広島ABC（原爆障害調査委員会）に年一回か二回検査に行きました。病気が見つかったとしても、治療はしてもらえません。あくまで研究機関です。そして中学生で私はあの日、モルモット扱いされた屈辱感の中、助けを求めた私の祈りを、神は聞いて下さらなかつたと思ひ、広島から東京、アメリカへと広島原子爆弾とは関わり

のないところへと逃げ出しました。しかし留学生活最後に私は米国に留まるために婚約をしました。が、破棄となりました。その理由は私が被爆者だからでした。致し方なく日本に帰ってきました。六名の被爆者を取り上げた「John Hersey（ジョン・ハーシー）の「Hiroshima」（ヒロシマ）」は一九四六年に出版され、その本により初めて広島島の被爆の悲惨さを、アメリカ人へ伝えたのでした。それから五三年後の二〇世紀最後（一

九九九年）に、ニューヨーク大学のジャーナリスト科がアンケートを採り、その結果「二〇世紀アメリカ・ジャーナリズムのトップ一〇〇」の第一位に選ばれたのが、ジョン・ハーシーの「Hiroshima（ヒロシマ）」でした。多くの人たちの心に被爆の恐ろしさは生き続けていたのです。原爆乙女の治療運動や精神養子縁組等、それと教会復興のために奮闘する父を私は理解できなかったが、隠退説教で「広島島の被爆者

主張

最近仕事で、中国内陸部から最西端の国境地へ三〇日間、韓国済州島へ、さらに昨年から毎月一週間の台湾滞在を行っている。連続する滞在地から日本を見ると「今の日本では落ち着いたよ

い仕事ができない」と感じるのである。それは、原発、地震、台風竜巻、歴史認識なき領土争い、アメリカ失業対策の米軍基地と軍国化、海外生産移行による、ブラック企業とリストラ、シヤッタだらけの地方都市、三万人以上の自殺者。一方、たかりで益々膨らむ一〇〇兆円債務、無責任な陣取り合戦と首相交代、就職予備校化した大学など、今の日本列島は不安材料がいっぱいである。ウルムチや台北の町には高層ビルは少なく、美しい伝統の建物がある。街頭には自販機やごみもほとんどなく、各寺院では多くの老若男女が夜遅くまで日々お参りをしている。高層ビルのソウルや東京では、物と情報文明があふれ、人の出

いと貴重な文化が次々失われ、落ち着かない社会情勢で人の心はますますすさんでいる。伝統工芸や芸術は、豊かな文化と人の心のつながりのあるところに「よい作品」が生まれる。それは「ビルで人工栽培した野菜と土で育てた野菜の違い」に等しい。台湾のマスコミは原発・地震・倒産・政権・経済・外交・自殺、リストラなどの記事が少なく、「落ち着いた平和」を感じる。台湾も韓国も徴兵制があるが、国の首長を国民の全員投票で選ぶことから、互いに責任の重さがある。韓国国内経済は低迷だが、済州島はソウルより、人の心も文化も豊かで農業収入も高く、教会と美しい自然が映画のロケ地となっている。

台湾は教会も多く、礼拝後は多くの若者も共に簡単な食事で暖かい交わりがある。今、週末の史跡めぐりと、教会出席を楽しみに、日本で拒否された、人と環境にやさしい作品（製品）を台湾でドイツから得た技術で作っている。

の為に役にたちたいという願いは、あの地獄のような焼け野原の中で、助けてえーという声を振り切つて、家族を案じて彼らを見捨ててしまったというエゴへの悔い。それと家族三人無傷に助かったという申し訳なきが、私を広島島の被爆者のためにと推進させたのでした」との言葉にやっと私は父がなぜ広島のために関わったのか理解できたのです。両親の生き残つた者として、広島のために、世界平和のために生きて欲しいという言葉に反発し、神は私の祈りをお聞き下さらないと思つていたが、それは長い年月をかけて一番よい方法で聞いて下さいました。神にも父にも背を向けて歩き始めたこのような者をも、神はしかと捕らえ、立ち帰らせ、用いて下さいました。「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。」（ヨハネの第一の手紙四・七（一二）。この御言葉を噛みしめつつ、赦されている者として、謙虚に愛を持って歩みたいのです。それは人種、国籍、宗教、言語、文化等の違いを超え、世界の子供達は「慰められるよりは、慰める

ことを。理解されるよりは、理解することを。愛されるよりは、愛することを。私が求めますように、ゆるすからゆるされ、自分を捨てて死に、永遠の命をいただくのですから」、做りたいものです。山上の説教の「平和をつくり出す人たちは、さいわいである。…」（マタイ四・九〇口語訳）とある。平和をつくり出した人たちは幸いであるとは、書いてない。何時の時代にあつても、平和をつくり出すことの難しさ、しかし、イエスは弟子達に、いや私達に平和をつくり出す者となりなさい、と語っています。被爆国である日本は世界に向けて、核兵器の廃絶を叫び続けなければならぬと思ひます。次の時代を担う子供達一人ひとりが与えられた命を最後の日まで平和に生きていけるように、と。お互いに理解し、愛し合い、仕えていくことができるようにと、皆様と共に祈り続けていきたいと思います。



講演「沖縄を覚えて」を聴いて、感じたこと

埼玉和光教会 岩井田慎一

去る、二〇一三年六月三〇日、当教会会堂で、大阪の大正めぐみ教会牧師上地武先生より、標記の講演をお聞きして、感想を述べて頂きます。

先生は、一九六二年琉球政府沖縄島、読谷村生まれで、アイデンティティーを、とてもこだわられる方で、現在は、日本政府統治の沖縄県であるが、一九七二年以前は、琉球政府統治の沖縄島であった。私たち、本島の、大和人は、日本に返還されたんだから、同じように中央政府から扱われているものと思っていたが、とんでもない、誤解をしてた事になる。

明治政府の時代に、「沖縄処分」という政策により、強制的に、日本に併合され、それまで東南アジア諸国と平和裏に、交易をし、文化交流も、盛んに行われていた、本当に平和で、温暖で、美しい、穏やかな、歌や、おどりの好きな国民性であったとのこと。
一九五二年四月二八日サンフランシスコ平和条約で、沖縄を除く本州等は、日本に、完全に交換され、日本政府が統治する事になったが、アメリカの占領側の、意向で、基地の島として、アメリカ政府の統治となってしまった。沖縄の面積は、日本の全面積の〇・六％、

人口は、一％なのに、日本にある米軍基地は全体の七五％が、集中している基地の島である。だから本土にはない事故や、事件が起きている。
一九七二年五月一日に、日本

に返還されながら、日本国憲法の及ばない、地域となってしまう、所謂「足を踏んでいる側と、踏まれている側」に、別れて、沖縄としては、後者で、痛い！と言いう、思いで、常にそういう状態が未だに続いている。一年中カレンダーを、埋め尽くす位、記念日や、集会がある。「うちなんちゅう（沖縄人）」としては、気が抜けない。日米の地位協定により、沖縄の市民の声は、無視される事が多く、社会差別とも、構造差別とも言える状態にある。

九割の日本人は、それに対して無関心である。マスコミも沖縄の情報に、関心が薄いのので大きく扱わない。勿論関心が、あっても知る由が無い。地政学的に見ても、沖縄は、東、東南アジア、中東地域の軍事プレゼンスを実施する場合アメリカにとって、最大の軍事最重要の基地と、捉えている。

日米安保条約が、破棄されるまでは、基地として、存続するであろう。

沖縄の人たちにとっては、鳩山元首相の唐突な「少なくとも県外」と言った時は、かなりその言葉

を期待した人もいたかもしれない。とにかく、毎日の、生活が本土と違う、困難なものとなっている。また、日本基督教団と沖縄基督教団との、合同の問題も残っている。



沖縄を覚える講演会を聞いて

和戸教会 亀ヶ谷豊彦

沖縄は日本で唯一全県が亜熱帯でサンゴ礁のリーフに碎ける白い波は私達をはるかな故郷へと誘います。沖縄が国内最高の観光地であることを否定する者は誰もいないと思います。

反面沖縄はもう一つの顔を持っています。例えばそれは洞窟（がま）であり米軍基地のフェンスです。沖縄は先の戦争で国内唯一、

地上戦の戦場となり、今また在日米軍基地の七五％がこの島々に集中しています。

上地牧師はそうしよう一つの顔を知ってもらいたいと私達に訴えています。沖縄とヤマト（本土）には大きな温度差がある。沖縄の人は本土の人が思っているような日本人としての感覚は薄い。それは日本という国が沖縄を植民地化してきたり見捨てたりしてきたからだと言う。この様なことによつて見捨てられた側からの意識、思いが強い。だから沖縄のことを良く知ってもらいたい。良き隣人として関わってもらいたいことでした。

【感想】

- ①沖縄のことを知らなすぎる。同じ日本、日本人なのに沖縄のことを知らないし、無関心であったことを反省しなければならぬ。
- ②沖縄のこの事実を知り、理解することが必要だ。
- ③学んでも、学ぶだけで、いつまでも他人事であり、自分自身の課題としない日本人。問題が多いです。自分事として真剣に考えることが重要が必要です。原子力発電所の問題も同じ様に対処している様に思い危険な、何かおかしい状態と感じています。
- ④いまだに、戦時下、戦争状態の危険な中においても、沖縄の人は、いつも陽気で、明るく生活している印象でしたので、不思議でした。

が本当は、違うのだという事が分かりました。真剣に、本気で平和を望んでいるのです。

⑤日本とは歴史も伝統も文化も違う沖縄を統治し続ける事は出来るのか？それが沖縄のためなのかを考える事も必要か？

⑥かつて「平和で豊かな沖縄県」を目指した復帰運動が追い求めたのは、日本的豊かさであり、問題にしたのは本土との格差であった。しかし、歴史的転換期には、必ずといってよいほど独立論的主張が登場するのも事実です。現在も独立論はあるようです。

⑦だから、現在は同じ日本人だから真剣に現在の日本国憲法を守り、日本から米軍基地を撤去して、軍隊を持たない、軍隊はいらない日本にしましょう。そのためには、沖縄の、本土の米軍基地の撤廃運動を、本気で行いましょう。まず沖縄の基地問題から、本土も、オール日本で取り組みましょう。

⑧当り前のことですが、ノーモア広島、ノーモア長崎、核原発反対。現在の平和憲法である日本国憲法で、沖縄の人と共に、日本人全員で平和な国、日本国を作っていくきましょう。

⑨もともと本気で平和を愛する沖縄の人々と共に、そして世界へ平和の輪を広げましょう。キーワードは世界の平和です。まず、被爆国である日本から、沖縄から始めましょう。本気で。以上。

韓国キリスト教長老会 京畿中部老会訪問

和戸教会 後藤 龍男

去る六月二十四日(月)～二十七日(木)、三泊四日の日程で韓国を訪問してきました。

関東教区と韓国キリスト教長老会京畿中部老会との交流事業の一環として隔年にそれぞれの教区(老会)を訪問することを申し合わせており、東日本大震災の年以外は相互訪問し、交流を重ねてきたものです。(教区通信にはその様子が記されている)今回は関東教区が韓国を訪問する年であり、埼玉地区委員会からの参加の呼掛があったので参加させていただきました。教区の事業なので各地区から参加者があり、牧師・信徒総勢一五名のメンバーでした。(内訳は埼玉八名、新潟三名、群馬一名、茨城三名、栃木〇名)それに通訳者一名でした。経路は羽田空港→金浦空港です。空港では京畿中部老会バクスンヒ老会長(光明(クワンミョン)教会牧師)を始め老会の皆様が出迎えて下さいました。日にち訪問先は以下の通りです。①二四日(月)光明(クワンミョン)教会での開会礼拝、関東教区「日本基督教団罪責告白」が今年の関東教区総会で決議されたことの説明と報告、歓迎晩餐会。②二五日(火)平澤(ピョンテク)教会訪問、松炭(ソントク)米軍基地村の宣教活動を聴

き、同基地村を見学。次にソウル市九老区にあるソウル外国人労働者センターを訪問、金宣教師からセンターの説明を受けたが、韓国には一五〇万人の外国人が住んでいる。ここでは外国人労働者を対象に医療機関や神学校、異文化を学ぶ学校や施設があり、幅広い支援活動を行なっている。二百名程の外国人労働者を受け入れており、利用料は全て無料とのこと。外国人との共生を教会としても考えていかなければならないとも。③二六日(水)ソウル市にある「光化門(クワンファムン)」では朝鮮王朝時代の「守門蔣交代式」見学後、昼一二時からの日本大使館反対側歩道での「第一〇八〇回日本軍慰安婦問題解決のための定期水曜示威」の集いに京畿中部老会の牧師・信徒と共に参加。関東教区を代表し秋山牧師が連帯の挨拶をしました。集会後明洞(ミョンドン)カトリック教会を目にしながら車でイエサラン教会(ペソンナム牧師)を訪問、閉会礼拝と共に送別晩餐会に臨み今回の訪問の最後を締めくくりました。これには教区からの一五名と通訳者一名に京畿中部老会側から三〇名を越す参加者があり総勢約五〇名で日・韓両教会の働きの上に主の祝福を祈りました。④二七日(木)安養(アニヤン)市にある平和保育園を訪問、金院長(女性)から説明を受け、園内施設を見学。園の子供さんたちの境遇は日本の子供とは何ら変わりはない

とのこと。このあと光明市にある「光明市老人総合福祉館」を訪問。高齢者のための多岐にわたるプログラムが用意され、高齢者の方々が意欲を持って参加されている様子を伺うことができた。この福祉会館を同市にある鶏鳴聲(ケミョンソン)教会(コワンチヨル牧師)が積極的に支援しているとのこと。福祉会館で昼食の接待に預かり教会の専用バスで金浦空港まで送っていただき、韓国滞在中京畿中部老会の先平方に色々お世話になったことを感謝しつつ帰国の途につきました。同老会が社会的な問題にも積極的に関心をもち老会に属する諸教会もそのような働きをされていることに大変感銘を受けました。まさに地の塩としての役目を韓国教会が果たしていることに韓国教会の底力を感じました。

関東教区のメンバーとして韓国を訪問するのは二〇年ぶりだったので大変新鮮に感じました。来年は関東教区が受け入れることになりました。今回、京畿中部老会の牧師・信徒の皆様から受けた心をつくしての対応に応えられるよう準備が出来たらよいと思いました。

社会委員会報告

◎沖繩を覚える講演会

日時：六月三日(日)

場所：埼玉和光教会

主題：「四二八五一五六二三：が語る沖繩」

講師：上地武牧師(大正めぐみ教会)

参加人数：五〇名(講師含む)

(地区内一教会・伝道所 茨城地区一名)

懇談会及び分かち合い

一七・〇〇～一八・〇〇

大会議室で参加者三〇名

◎平和を求め八・一五集会

日時：八月一日(木)

場所：埼玉和光教会

主題：「平和を作り出す人たち」

講師：近藤絃子氏(核兵器をなくす国際活動家)

参加人数：七〇名(二五教会)

懇親会及び分かち合い

一三・〇〇～一三・〇〇

大会議室で参加者三五名

◎第三回社会委員会

日時：八月一日(木)

会場：大宮教会

演題：「未定」

講師：小海 基氏

出席者：全委員

一、八・一五集会の反省

二、二・一一集会の講師について
三、会計担当より残り予算について説明

四、関東教区社会活動協議会主催「渡良瀬川の慈しみ」担当委員より一泊二日の趣旨内容及参加の仕方の説明有り。

五、次回の委員会は、一〇月二〇日(日)一五・〇〇(地区社会活動委員会の後) 場所：上尾合同教会

編集後記

冒頭の八・一五集会に第一五回と入れました。これまで、どの集会(「環境問題講演会」「八・一五集会」「二・一一集会」)にも回数をカウントしてきませんでした。今回、これまで積み重ねてきた貴重な事柄を大切にしようという意味からも、これからはカウントすることになりました。因みにこれまでの講演会は次の様に回数を数えて開催してきました。環境問題は「第一二回」、八・一五集会は「第一五回」、二・一一集会は「第一四二回」です。
どのような内容で開催されてきたか興味もあるかと思えます。次回以降の「埼玉の夜明け」でお知らせすることにします。(浅子)